

# 話じやれ (11)

岐久 ようこ

スズメをペットに

稲穂いなほがふくらむと集団で  
食い荒らすイメージ

「秋が待ち遠しいナー」

「バサッ」と田んぼに降り

「満腹でチュン！」

何度もくり返して

それらが恨みを買って半減  
家の周りで見かけるのは

子が二羽でやってくる

たまにお母さんといっしょ

スズメは縄張りというもの持たず

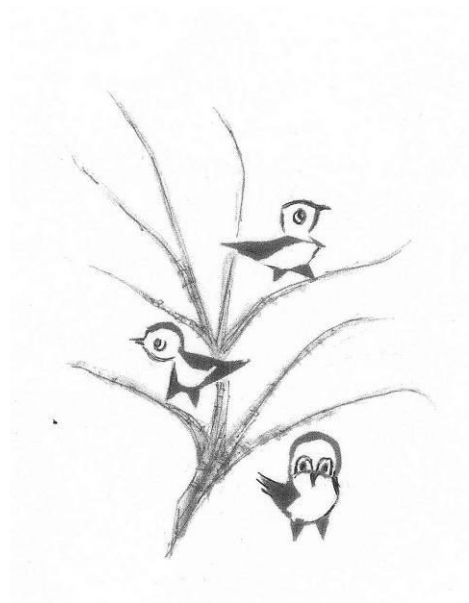
すぐ横で巣づくりされても平気

「こんにちは」

「どうも」

巣づくりする場所が駐車場になったり

古い家が建て替えられて



新しくなると瓦屋根じやない

巣がつくれないうなら、親のいぬ間に

子スズメを巣から落す

「巣の横取り」がある

それでかどうか

子スズメの平均寿命は半年に

おみクジを 持ってきたと 寄ってくる

スズメさん ペットにしても いいのかな

夏虫異変から

蚊取り線香がいららない？

あの一瞬の刺し手

気がついた時には

「ブーン いただき！」

そつと ソフトに止まる技わざには

敬服するしかない

だが長年の悔しさをぶつとばす

題して「殺虫白書」が初めて出た

梅雨明けの時期が早く

水溜りや水場が少なく

幼虫が育たず その上連日の猛暑

三六度にも上ると「もうあ蚊ん」

人間ばかりでなく蚊もダウン

「吸血する意欲さえ失って」

身動きできないなんて

それでゲノム編集を考えた蚊か

遺伝子改変で強健に

高校生ぐらいの肌をめざして

まず お試しの一刺し

あつかゆい なんてなんで どうして  
一刺しの キャンペンガール 私なの



想像上のマドンナ

オノレの目を疑った  
あれほど自信もって

「私よりプリプリな生徒はいない」  
見わたして言ってた

「あの少女が河童のようなカツラ」  
同窓会での再会は

「火星でひよつとしたら大古の  
生命の跡を発見」ぐらいの

期待感でふくらんでいたのに  
歌手のマドンナと勘違いしてたな

ダンスが上手で  
元はディスコガール

そんな彼女も地球規模で  
歌いまくり六十代に

「私ほど脚光あびた歌手  
いるかしら

もう地球に飽きたわ」  
「華麗なリング状の土星へ」

ちよつと遠い

「地球に近い火星はどうか  
マドンナは天狗になった？  
チコちゃんは目パチクリ

ボオーツと 焦ってるんじや  
ダメですよ 河童になったり  
天狗では  
ないですか



両手を挙げて

「やったぞ」

リングでは今しがた試合終了の

ゴングが鳴ったばかり

二度も相手をダウンさせたので

勝利は当然

両手を挙げて興奮して跳ねあがっていると、横では

「赤コーナーの勝ち」

レフェリーが相手の選手の手を高く挙げていた

観客から「おかしい」のヤジが飛ぶが

判定をくつがえせず

「奈良判定」とされていたもの

ボクシング界では理事長ごひいきの

奈良県の選手には審判が甘い

「ダウンした」誰が見ても負けでも

「接戦スレスレ」で奈良の選手の勝ち

みんな知っていた

そういう訳で

「ノックアウトさせるしかない」

ただ、二度のダウンでも

「起き上がってくりや

パンチ不足じゃ」エエツ？

ボクシング 奈良の掟が おきて 巾きかせ  
あの判定 大仏さんも おかしいがる

